

研究発表申込フォーム

氏名:ウニルサイハン

氏名のローマ字表記:Onorsaikhan

所属:総合研究大学院大学 博士後期課程

専門分野:人類文化研究コース

発表のタイトル(日本語):活性化する施身法:アラシャ・モンゴルにおける仏教実践の考察から

発表のタイトル(英語訳):The Revitalization of Chöd: Buddhist Practice in Alshaa Mongolia

発表要旨(日本語で 600 字~800 字程度):

モンゴル語でジョド(Mo. Chöd, Tib. gcod)と呼ばれる修法は、施身法と訳される。施身法は、11 世紀のチベットで体系化された密教の特別な修行であり、自己の身体を「供物」として仏や護法尊、精霊に捧げることによって、執着心や恐怖心を断ち切る(Tib.gcod sgrub thabs)実践である。チベット仏教のモンゴルへの伝播に伴い、この修行法もモンゴル人の間に広まった。

施身法は、カギユ派やニンマ派では盛んに行われたが、ゲルク派の学問寺では法会として行われず、正統的实践とはみなされにくかった。そのため、ゲルク派が主流の内モンゴルでは周縁的な位置づけにとどまり、施身法を行うラマ僧も少数派であった。文化大革命期には、この伝統が一時的に途絶したが、1980 年代以降、宗教復興の流れの中で施身法は再び活性化している。ただし、現在でも施身法が盛んに行われる地域は、内モンゴルの中では主にアラシャ盟に限られている。

この実践をめぐる評価は社会の中で分かれている。ある者はラマ僧を「死霊への供養(Mo.čidkör teḷigeḷü bui)」と批判する一方で、別の者は「末法時代にふさわしい修法」と称賛する。とりわけ、一部のモンゴル人は毎年ラマ僧を自宅に招き、施身法の供養会「ツォクライ」(Tib. tshogs)を唱えてもらう実践を広めてきた。

本発表では、アラシャ盟で実施したフィールド調査をもとに、1980 年代以降の施身法の活性化の実態を報告する。さらに牧民の家で行われる「ツォクライ」という儀礼に焦点を当てることで、人々の日常生活の中で宗教実践がどのように受け継がれ、新たに展開しているのかを考察していきたい。